

人形のための人形作り

伽羅さん(西三里塚)



プロフィール：伽羅(から)
昭和52年生まれ。平成13
年から市内で人形作りを始め、高さ30センチ程度から
等身大までと、多様なサイ
ズの作品を手掛けている。
2月には、作品の展示会を
開催予定

細部への作り込みを重ね
作品に力を宿す

ガラスでできた瞳に力強い個性をたたえ、和服をはじめとするさまざまな衣装を身にまとった人形たち。各パーツの自由な動きを可能にするため関節部分に球体を用いていることから「球体関節人形」と呼ばれるこれらの人形は、市内で創作活動を続けている伽羅さんの手による作品。8年前から独学で人形作りを始め、球体関節人形を中心に、今までにおよそ30体の作品を完成させた。

元々は画家を目指していた伽羅さんが人形作りに関心を抱いたのは、雑誌に掲載されていた球体関節人形の写真を目にしたとき。絵画に取り組みながらも、二次元の世界では表現できない立体的造形物に興味があったため、人形の美しさに創作意欲を刺激され、転向を決意したという。

人形の原料となるのは、粘土をはじめとする天然素材。着色には、日本画の絵付けにも使用される胡粉^{かん}を用い、磨きを掛けて形を整えた後、油絵の具で仕上げる。

伽羅さんは、人形に合った衣装を自ら縫製し、植毛した髪には



ミリ単位のカットを施していく。ディテールにこだわって人形を作り上げていくそんな彼女が創作の工程で最も気を使うのは、人形の目と手に着手するとき。人形の感情を端的に表す部分だけに、納得いくまで作り込み、作品に魂を吹き込んでいく。

作り手としての自分が人形にしてあげられること

個展の開催や写真集の出版をきっかけに、作品に対するさまざまな意見を耳にするようになった

伽羅さんだが、彼女自身は自ら手掛けた人形に対して「美しい」とか「恐ろしい」といった特定の感情を抱くことはないという。

「人形が、それを見る者に与える印象は、作り手である自分が意図的に創出できるものではない」というスタンスで創作活動に取り組む彼女にとって、それぞれの人形が発する個性は、それを目にした人からもたらされる感想を通して受動的に認識されていく。

「人形の個性をわたしが知る手掛かりとして、作品を見た人からの意見はとても貴重なものなんです

す。わたしが人形にしてあげられるのは、技術を磨き、作品としてのクオリティを高めることだけ。だから、より多くの人に作品を目にしてもらいたいと思っています」

人形を作ることも、それに伴う技術の向上も、すべてが「人形のため」と語る伽羅さん。今後は、彫刻などの分野にも活動の幅を広げていき、「自分が伝えたいことをストレートに表現できるような、わたし自身のための創作活動も模索してみたい」と笑顔をのぞかせた。

